

藤原良経『六百番歌合』について

——先行作品撰取を中心に——

大野 順子

要旨

藤原良経主催の『六百番歌合』（建久三年給題）は、旧風の六条藤家歌人と新風の御子左家系統の歌人との間に歌論上の激しい対立をもたらした歌合として夙に知られている。これはまた、新古今時代の前後にあたる時期に和歌界を領導した九条家歌壇における最大の盛儀とも位置づけられ、新風台頭期の詠風を分析する上で重要視されている。

良経の百首についても、主催者・給題者という立場にあることから歌題との関わりについて論じられた他、新古今時代の主要な技法である本歌取りに繋がるとして先行作品撰取の方法に関する研究に連なるものである。その中でも特に、これまであなされている。本稿はこれらのうち、先行作品撰取の方法に関する研究に連なるものである。その中でも特に、これまであまり取りあげられてこなかった和歌の隣接領域に位置する作品を取り込んでいこうとしていた良経のあり方について論じた。

本百首の良経詠に見られる当代的な性格については、同時代歌人の詠を積極的に取り入れた作品作りが志向されていることがすでに指摘されている。しかしながら本百首を丹念に見渡していくと、あからさまな取り入れ方ではないものの、今様や短連歌といった和歌に隣接する領域の作品からも影響を受けていたあとが見られた。今様の詞章にみられ且つその興隆期以降に和歌へと取り込まれた語彙が作品に取り入れられていた他、句の「型」を取るといふ短連歌に多用される先行作品撰取の方法（詳しくは、拙稿「源俊頼の和歌と短連歌」『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』第三十七号、平成二十三年二

月」を参照) が用いられていたのである。このように、本来であれば和歌よりも一段低く見られていた隣接領域の作品をも利用して先行作品撰取の自由度を拡大していたことは、新古今時代における本歌取りへの道筋を考えるうえで見過ごすことができない要素と言えよう。

はじめに

藤原良経によって主催された『六百番歌合』（建久三年給題）は、顕昭と寂蓮の「独鈷鎌首」の争いに象徴されるように、旧風の六条藤家歌人と新風の御子左家系統の歌人との間に歌論上の激しい対立をもたらした歌合として夙に知られている。この歌合はまた、後鳥羽院歌壇において花開く新古今時代の、いわば前夜にあたる時期の和歌界を領導した九条家歌壇における最大の盛儀であったとも位置づけられよう。こうしたことから、『六百番歌合』については早くから論じられているのであるが、近年では、良経によって工夫された歌題を起点として和歌表現の進展を考察するものや、左右の方人による難陳とそれを受けて展開される俊成の充実した判詞から当時の歌論を探ろうとするものなど、論究の方向は多岐にわたる。あるいは、新風台頭期における歌人個々の詠風を分析する上でも本歌合は重要視されている。

良経の百首についても、主催者・給題者であるという立場から題にかかわって良経個人の嗜好であるとか歌壇的な題詠の展開というようなことが論じられた他、新古今時代の主要な技法である本歌取りに繋がるものとして先行作品撰取の方法に関することが論じられるなど、様々な面から立論がなされている。⁽³⁾ 本稿はこれらの先行研究のうち、先行作品の撰取方法についての研究に連なるものである。その中でも特に、これまであまり取りあげられてこなかった和歌の隣接領域に位置する作品——今様や短連歌——など、当代的なものを積極的に取り込んでいこうとしていた良経のあり方について考察していく。

一、当代詠からの摂取

まずは周辺歌人の詠からの摂取状況を中心に見ていく。同時代詠の摂取は後代に定められた定家の本歌取りの準則に従うならば禁止事項に抵触することになる。しかし、『六百番歌合』出詠時には定家自身にとつても本歌取りの技法が確立していたとは言い難い状況であるので、本稿では同時代歌人のものであつても明らかに新詠に先行する場合には本歌取りと認める、広義の本歌取りとして論を進める。

すでに指摘されているが、良経は同時代歌人の詠からの摂取が著しい。⁽⁴⁾『花月百首』を詠じて四年ほどであることを考えれば、良経が歌人としての成熟期を迎えていたとは言い難く、同時代の、とりわけ定家・慈田といった身近な新風歌人から積極的に学んでいる様子は、周囲にあふれる新しい詠法を旺盛に獲得しようとする習作期にあつたと見てよからう。

ゆききゆるかれののしたのあさみどりこそぞのくさ葉やねにかへるらん(若草 四七)

雪きゆるかた山かげの青みどり岩ねの苔も春はみせけり(拾遺愚草) 閑居百首 春廿首 三〇六)

花悔帰根無益悔鳥期入谷定延期(和漢朗詠集) 閏三月 六一)

「ゆききゆる」と詠み出す先行例は意外に少なく、右にあげた定家歌の他には『寂蓮無題百首』の恋歌⁽⁵⁾にしか用例がない。しかし第三句に「みどり」が入ることや、良経・定家ともに青々と萌えいつる春の草のようすを歌っていることから、良経が著名な『和漢朗詠集』六一の句とともに、定家詠から学んで春歌を詠んだことは明らかである。さ

らに良経は、『文治六年女御入内和歌』で自詠に用いた珍しい詞続きの句「かれののした」⁶⁾を再び用いており、詞の新しさを求めた歌作りがなされていたことも指摘できよう。

よしのがははやきながれをせくいはのつれなきなかに身をくだくかな（寄河恋 九九五）

芳野川はやきながれもこほるなりくれゆく年よなにたとへん（『壬二集』初心百首 冬 七〇）
いかにせん人のつらさを思ふとて我のみひとり身をくだくかな

（『堀河百首』恋二十首 片恋 顕仲 一二五八）

このごろのこころのそこをよそにみばしかなく野辺の秋のゆふぐれ（寄猷恋 一〇六七）

あはれさはにるものぞなきつまこふるしかなくのべの秋のゆふぐれ

（『歌合文治二年』鹿 二番 左持 経家朝臣 七一）

右にあげた「寄河恋」と「寄猷恋」の良経詠は、いずれも本歌の句を大きく切り取り、置き所も同じくするという形を取っている。「寄河恋」の場合、上句は「つれなきなかな」にかかる序詞となっており、この歌の本旨は下句で歌われる恋の苦しみである。その恋の辛さを表現しているのが結句「身をくだくかな」であるが、良経が詠もうとした恋の辛さは「はやきながれをせくいはのつれなきなかな」という表現からして片恋と考えられる。このとき、結句を『堀河百首』の「片恋」の題で詠まれた歌にしかみられない「身をくだくかな」という句で表現した良経歌は、詠歌内容も本歌である『堀河百首』詠に拠っていると見えよう。

「寄獸恋」は、下句をほとんど他に類例の見られない「しかなくのべの秋のゆふぐれ」とする經家歌に負っている。先行歌は「鹿」題を詠じたものであるが、第三句に「つまこふる」とあるように鹿が妻を恋うて鳴くという趣向は古くから見られ、本歌の趣向を大きく変えることなく自らの詠に取り込んでいえると言えよう。

これらのように、分かりやすい形での先行歌の取り込みが多数見られる一方で、のちの定家の準則に従う歌も見られる。

もらすなよくもゐるみねのはつしぐれ木の葉はしたにいろかはるとも（忍恋 六一三）

もる山のほとりにてよめる つらゆき

しらつゆも時雨もいたくもる山はしたばのこらず色づきにけり（『古今和歌集』秋歌下 二六〇）

霧たちてこの葉は下に色づきぬよわたる月の末をかぞへて（『拾遺愚草員外』一字百首 秋 四五）

新日本古典文学大系『六百番歌合』（以下、「新大系」と呼ぶ。）は貫之歌を本歌とする。これに異論はないが、良経の下句は句の近似から、直接には「一字百首」における定家詠に学んだのではなからうか。これら二首は時雨と霧という違いはあるものの、いずれも秋の木の葉が色づくさまを歌っており、良経はより近い時期に詠まれて印象も鮮やかな定家の句を用いた。そして、初句で「もらすなよ」と木の葉の色を染め変える時雨に対して呼びかけ、おまえ故に下葉の色が変わったとしても私の恋心は漏らすなと歌い、秋歌を恋歌へ転じた。

同時代を学ぶという点でもう一つ特徴的なのは、建久前期あたりに成立した『玄玉和歌集』からも表現を取り入れていることである。

ありしよのそでのうつり香きえはててまたあふまでのかたみだになし（稀恋 七三九）

心ざし有明方の月影をまた逢ふまでの形見とは見よ（『とりかへばや物語』七七（男尚侍））

花たちはなの心をよませ給ける 前宮内卿季経

有りしよの袖の匂ひはわすれぬを花立ばなのほめかすらん（『玄玉和歌集』草樹歌上 六二八）

波線で示した句はいずれも他に先行例のない表現である。句の置き所が、それぞれ本となっている『玄玉和歌集』・『とりかへばや物語』の歌と同じであり、これら一首を本歌とみてよからう。『とりかへばや物語』は後朝の場面の贈答歌である。一方、『玄玉和歌集』の「草樹歌上」に置かれた季経歌は、もともと『伊勢物語』六十一段において、別れた妻への思慕を詠じたことで著名な「五月まつ花たちはなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする」（一一〇九）を本歌とする作品であり、そのような歌が「稀恋」題の歌の参考とされたのは自然なことと言えよう。

あしがきのうへふきこゆるゆふ風にかよふもつらきをぎのおとかな（近恋 八八七）

あしがきはへだつとすれどをぎのはをふきこすかぜのおとはかくれず

（『為忠家初度百首』秋 隣家萩 為業 三四三）

わぎもこを待ちつるよひの風ならばあやしかるべき萩のおとかな

（『玄玉和歌集』草樹下 題不知 隆信朝臣 六七七）

良経詠に対する参考歌として、新大系は右の為業詠を指摘する。為業詠は語彙の近さのほか、聴覚的把握を指向す

る点でも良経詠に近く、作品に影響を与えていると考えられる。しかしこれに加えて、『玄玉和歌集』の隆信詠からの影響があったと見たい。隆信詠に用いられている「萩の音かな」という句の用例は意外に少なく、現存する先行例は和泉式部と長方の各一首である。それに加えて、第三句にそれぞれ「ゆふ風」・「よひの風」と近似した語を置き、いずれも暮れ方の風によって起きる萩の葉擦れの音によって恋人の訪れを思うという趣向が一致する。

『六百番歌合』出詠当時、『千載集』よりも近い時期に『玄玉和歌集』は編纂された。私撰集であるため勅撰集のような権威は持たないものの、私撰という自由さの分だけ当代の流行を素直に反映していたと思われる。その『玄玉和歌集』において、良経歌の入集歌数は定家・西行などを超えて俊成に次ぐ二位となっている。もともと「九条家を軸とし、俊成・定家・家隆・寂蓮・隆信ら御子左一門や、西行・実定といった俊成に近い歌人」⁽⁸⁾が優位の歌集であるとの指摘があるものの、歌歴の浅い良経が集中二位を占めるといえるのはやはり驚くべきことである。そうした扱いが、自らの作品に対する自負心のようなものを良経に与えたことは想像に難くない。そのような歌集を座右において、新たな歌を詠み出していた可能性は低くないだろう。

このように、同時代の詠風を積極的に取り入れていた良経であるが、当代の流行を敏感に取り入れようとする姿勢は和歌から学ぶのみにとどまらず、物語からの摂取も旺盛であった。これについては伊東成師氏が「歌合百首から西洞隠士百首までの中期の特徴」として「この期以降物語歌からの摂取が著し」⁽⁹⁾くなることを指摘している。稿者もかつて『正治初度百首』における物語の摂取について論じたなかで『六百番歌合』における物語の摂取に触れ、伊東氏の見解に従う立場で論を進めたのであるが、数年を経て再度調査をしたところ、若干の修正を加える必要があることが分かった。詳しくは旧稿に譲るが、本歌合出詠当時の良経は『源氏物語』と『狭衣物語』に対する学習がそれほど進んでいない時期であったと述べた。⁽¹⁰⁾しかし本稿執筆に際しての調査によって、以前の指摘のほば倍、物語からの撰

取を確認できた。一例をあげれば次の通りである。

ふえたけのこゑのかぎりをつくしてもなほうきふしやよよにのこさむ(寄笛恋 一〇九二)

鈴虫の声のかぎり⁽¹⁾を⁽²⁾尽しても長き夜あかずふる涙かな(『源氏物語』桐壺 鞠負の命婦 三)

「こゑのかぎりをつくしても」という句は他に類例がなく、良経が『源氏物語』歌から取ったことは明らかである。また両首ともに、声の限りを尽くして嘆きあかしても嘆きが尽きることはない⁽³⁾と歌っていて、内容的にも近い。

旧稿において『源氏物語』・『狭衣物語』の習熟の不十分を論じた背後には、これら代表的な物語に対する学習が未だ進んでいない時期に、それら以外の物語からの摂取はさらに乏しいのではないか、との考えも含まれていた。しかし、先にあげた「稀恋」七三九に『とりかへばや物語』の歌の句が取り入れられているなど、この頃の良経は、すでに物語からの摂取に関心と親しみをもっていた可能性が考えられる。新古今時代における物語摂取の隆盛という着地点には変更がないものの、文治期の定家に『源氏物語』の影響が見られること等と合わせて、良経の物語摂取の始発については再考の余地がある。ただし、本稿の論旨からは些か外れるので別の機会に譲りたい。

以上、この期の良経は、同時代歌人の表現を積極的に学ぶというように流行に敏く、まだ一般的にはさほど広まっていなかった物語の摂取にも意欲的に取り組むなど、当代の新傾向に対して関心が高かったことを確認した。こうした詠風は「新儀非抛達磨歌」を詠ずるとされていた新風歌人に相応しい態度であったと言えよう。

二、句の「型」を取る——短連歌との影響関係

本節では、当代的な流行のうち、和歌の隣接領域に位置する短連歌と良経歌との影響関係についてみていく。かつて別稿において、院政期和歌の先行作品摂取の方法として、短連歌にまみられた手法である句の「型」をとるという方法がとられていたことについて論じたが、これと同様の傾向が引き続き『六百番歌合』にもみられる。

あきならば月まつことのうからましさくらにくらす春の山ざと（遅日 一二九）

秋ならばいなばのつゆにぬれなましさなへをわくるをだのほそみち（『広言集』早苗失道歌合 三三三）

秋ならば身にしむ色やこからましまだしき野べの荻のゆふかぜ

（『拾玉集』緇素歌合十題 風前夏草 三九三〇）

秋ならばいかに木の葉の乱れましあらしぞおつる足柄の山（『海道記』六〇（作者））

秋ならば花に心やとどめまし霜にかれたる萩はらの里

（『夫木和歌抄』はぎはらのさと、常陸 家集 光俊朝臣 一四五六八）

「秋ならばくましく（体言止め）」という句の「型」は『広言集』が早期の例で、おおよそ十二世紀後半から繰り返して用いられるようになったと思われる。「秋ならば」と季節を限定した初句によって文脈に一定の制限は設けられているものの、主題の変更を容易にするという句の「型」の特性を生かし、それぞれの下旬に「早苗」・「桜」が詠みこまれるなどバリエーション豊かな展開を見せている。良経歌の場合には、秋であれば月の出を待つて心憂く過ごすだろうが桜と暮らす春の山里はそのような物思いはないよ、と秋と春を対比的に扱って春を賛美している。さらにこの下旬に

は、「もしもしきの大官人はいとまあれや桜かざしてけふもくらしつ」(『新古今和歌集』春歌下 題しらず 赤人 一〇四)という著名歌を凝縮した表現が取り入れられている。この表現については小山順子氏の論に詳しいが、⁽¹⁴⁾「本歌を凝縮する表現」を用いる本歌取りは、本歌合で俊成に批判されつつも後の後鳥羽院歌壇において受け入れられている。斬新な本歌の取り方であった。ここでは「さくらにくらすなどいへる下句をかしく聞え侍り」と一応の評価は得ているものの、小山氏は良経詠全体に向けられた俊成評を見渡し、俊成の批判は表現が圧縮されることで本歌が分かりづらくなることへの危惧であったらしいと指摘する。俊成には斬新な先行歌撰取の方法が行き過ぎに感じられたとしても、句の「型」を用いたために創作できる語数が狭められている所へ先行歌を取り入れるには、凝縮された表現は有効な手段となると良経は考えたのではなからうか。⁽¹⁵⁾類似の例は他にも見られる。

てにならすなつのあふぎとおもへどもただあきかぜのすみかなりけり (扇 二五三)

みくしげどのはじめてつかはしける あつただの朝臣

けふそへにくれざらめやはとおもへどもたへぬは人の心なりけり (『後撰和歌集』恋四 八八二)

康保二年正月、忠君来小野宮、是貞信公御愛孫也、仍以大徳勸盃酒、其次有此詞

あたらしき年のはじめと思へどもとまらぬものは涙なりけり (『清慎公集』九九)

かねのうたよまむと少将のいへば、ものいはじとかはべりつるとうちにいへば、少将

かねのおとにものはいはじとおもへどもきみにまけぬるしじまなりけり (『大斎院前の御集』三一九)

ゆめにだにうちとけなばやと思へどもそれもうつつの習ひなりけり

『林葉和歌集』右大臣家百首、忍恋五首 六七八)

煩瑣となるので先行歌のごく一部をあげたが、「〜とおもへども〜なりけり」という句の「型」は非常に用例が多く、汎用性の高い形式であった。「〜とおもへども」と表現する上句の内容によって様々な題に活用することが可能であり、ここでも四季歌や恋歌のほか活用の範囲は広い。

ところで、方人の良経歌に対する難陳に「夏の扇古風棲新」との言がある。たしかに夏歌で扇が詠われることは多く、「扇の風を忘れる」といった表現は枚挙にいとまがない。しかしその一方で、良経歌のように「手になら」した「扇」という表現を用いて詠んだ先行例は意外に少ない。

とほく行く人に、あふぎをとらすとて

手にならすあふぎの風をそへたらばあゆくくさ葉につけてわするな（『赤染衛門集』六〇六）

手にならすあふぎの風にあやなくも露ぞこぼるる床夏の花

（『林葉和歌集』夏歌 近見瞿麦重家卿会 三二四）

赤染衛門詠は、旅に出る人へ贈った扇に付けられた歌である。一方、俊恵詠は家集の夏歌の部におさめられている。詠出時期の近さからみて良経は俊恵歌から句を取り、初二句に「夏の」という語を加えることで俊恵詠全体を想起させるような表現を仕掛けたのではなからうか。このように考えるならば、下句についてもほぼ同様の論理でもう一首先行歌摂取の可能性を指摘できる。

ふるさとはかせのすみかとなりけり人やはらふにはのをぎはら

ここで用いられている「かぜのすみか」という句は方人が「風棲新」と述べるように新しい表現である。同時代以前に類例のないことから、おそらく良経によって創作されたものであろう。その新しい句を気に入って再び自詠に取り込もうとしたときに、おもに秋の景で詠まれる「をぎはら」を詠みこんだ自詠を強調するために「秋風」とした。俊恵との親交があり、九条家の和歌師範でもあった俊成であれば、良経がどのような歌の取り込みを画策してなした表現であるかは難陳をしていた方人たちよりもよく理解していたと思われる。しかしその斬新な手法は、方人の「夏の扇古」という評価から推測されるように、俊恵の類例の少ない新鮮な詞統きを利用していたことが理解されず、良経が思うとおりに機能しなかった。それゆえに俊成は右の方人の難陳を残した上で負けとして遠ざけたのではなからうか。

また、前節で良経が参観した可能性を指摘した『玄玉和歌集』には次のような歌がある。

早秋忽涼といふ心をよみ侍りける 左中将公経朝臣

うちおかぬ心は夏にかはらねど扇のすゑに秋はきにけり 〔『玄玉和歌集』時節歌 四一一〕

一首全体の発想と構成は、あるいはこの歌あたりであった可能性も考慮すべきかと思われるが、そうであったとしても、既詠から得た発想と構成を再構築するにあたって、句の「型」を用いたところに、この当時の良経の好尚が現れていることは指摘しても良からう。

たにふかみはるかに人をきくのつゆふれぬたもとよなにしほるらん（聞恋 六三三）

たにふかみ水かけ草のしたつゆやしられぬ恋のなみだなるらん

〔統後撰和歌集〕恋歌一題しらず 俊頼朝臣 六八一／『散木奇歌集』寄草恋 一一二一六

谷ふかみ木の葉がくれをゆく水の下にながれていく世へぬらん

〔堀河百首〕恋十首 不被知人恋 肥後 一一五〇

賀茂社にて、うぐひすをよめる

たにふかみゆきふるすなるうぐひすはかすみとともにたちやいづらん（『成伸集』三）

谷ふかみ人もかよはぬ山ざとはうぐひすのみや春をつぐらん（『月詣和歌集』正月 平資盛朝臣 三二二）

谷ふかみ雪にこもれる鶯もとくる春をよしたにまつらん（『寂蓮法師集』四九）

北野社百首御歌 後鳥羽院御製

谷ふかみ日影の露もとけにけりみやまがくれも春やたつらん（『夫木和歌抄』春部一 一三四）

「聞恋」六三三は「たにふかみらん」という句の「型」を用いている。この良縁歌については、俊成の判詞に「谷の菊」とあることから『初学記』巻二七花草・菊あるいは『藝文類聚』巻八一葉香草部・菊に引かれている南陽酈県の伝承を下敷きとしているとの指摘がある。菊花を題材とした恋歌を詠むにあたって、良縁がわざわざ「谷」の入った句の「型」を選び取っていることから見ても、この指摘に異論はないが、漢詩文からの影響に加えて、句の「型」の中に封じ込められたもう一つの先行歌摂取の可能性を考えたい。

菊の露を詠んだ人事詠では、菊が重陽の節句にかかわることもあつてか、多くは長寿に関する賀歌あるいは寿命を

全うできなかった者への哀傷歌に用いられている。また、菊が恋歌の題材となるのは珍しい。試みに、良経歌と同じく「菊」に「聞く」をかけて詠まれた恋歌を掲出すると、先行作は次にあげる二例となる。

おとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし

（『古今和歌集』恋歌一 題しらず 素性法師 四七〇）

九日、わたおほはせしきくをおこせて、みるに、露しげければ

をりからはおとらぬ袖のつゆけさをきくのうへとや人のみるらん（『和泉式部統集』五八一）

和泉式部詠は、ぐつしよりとぬれた菊の着せ綿に自らの袖を連想するも、そのような嘆きを遠く余所に聞く思い人への恨みを歌うという点で良経歌に通じる。使用語彙もよく似ており、「いま実際に濡れているのは菊の着せ綿で、私の袖ではないけれど」という和泉式部詠の含意を「きくのつゆふれぬたもと」という表現に取りなした可能性が指摘できよう。⁽¹⁷⁾俊成判がこの表現を「いますこし優に侍る」とのみ評し、具体的な先行表現を指摘しないことは気に掛かるものの、そもそも俊成は「谷の菊」から一首の発想を漢詩文から得ていると解していた蓋然性が高く、詞をあらわに取らず本歌を明確に指摘しがい先行歌撰取については考えの他ではなかるうか。

以上のように、良経歌に見られた句の「型」を取るといふ短連歌的にしばしばみられる方法は、別稿で論じた院政期和歌のように単に主題の転換を容易に図るためだけに用いられてはならず、⁽¹⁸⁾さらに制限された文字数の中に先行歌の表現を取り込むことで、句の「型」によってできた隙間に単純に主題に合う詞をはめ込むよりもずっと濃密で情感に溢

れた詠歌世界を形成することを指向していた。かつて稿者は『正治初度百首』における良経の本歌取りについて、「根を同じくする本歌二首によって、重層的な構造をもつ情致に富んだ詠歌世界を構築⁽¹⁹⁾」しようとしていたと指摘したが、本節において述べた先行歌撰取の手法は、その萌芽的段階を示すと言つてよいだろう。これらのことから推すならば、句の「型」を取るといふ短連歌的な手法は、初期にあつては初学者がより簡便に新歌を詠み出す助けとなるものであつたが、さらに学習の進んだ段階では、制限の加えられた形式の中にいくに多くの情報を取り込み、いかに詠歌世界の密度を上げると言うことを模索する方向へと和歌を向かわせたと考えられる。

三、今様からの影響

前節では当代に流行し和歌の隣接領域に位置するものとして短連歌を取りあげたが、本節では和歌の隣接領域に位置するもう一つとして今様を取りあげ、良経歌との間に見られる影響関係について確認していく。

わすられてわが身しぐれのふるさとにはばやものをのきのたまみづ

〔秋篠月清集〕院句題五十首 寄雨恋 九九二

雨ふれば軒の玉水つぶつぶといはばや物を心ゆくまで

〔古今著聞集〕卷六 管絃歌舞第七「侍従大納言成通今様を以て靈病を治する事」 二二三

後の後鳥羽院歌壇で行われた『院句題五十首』において詠まれた歌が、成通の活躍期ごろに流通していた今様に学

んでいることは明らかである。しかし、このほかの良経の詠歌に今様の影響があったのかについてはこれまでほとんど言及がない。『六百番歌合』に見られる歌謡的な要素として、新名主祥子氏が恋題の末尾に位置する人倫五題——遊女・傀儡・海人・樵夫・商人——の選定に『散木奇歌集』とともに『梁塵秘抄』からの影響がみられると指摘するものの⁽²⁰⁾、それは給題者としての良経の意識を論じたものであり、歌謡的な要素が良経の実作にどのような影響を及ぼしていたのかということ論じたものはほとんどない。その一因として、『六百番歌合』の良経詠に今様の詞章がはつきりとあらわれないことがあげられよう。

六番 左勝 女房

たれとなくよせてはかへるなみまくらうきたるふねのあととどめず（寄遊女恋 一一五二）

右 寂蓮

いづかたをみてもしのばんにはめのうきねのあとにきゆるしらなみ（一一五二）

左右ともにあしからぬよし申す

判言、両方共にすがた詞優にみえ侍るを、右のなにはめこそ、あまのこほどの事に侍るを、これは朗詠にいれりといふ証だになきにや、いかが、左のよせてはかへる浪枕は、なかなか遊女とみえて、まさると申すべくや

ここで俊成は「よせてはかへる浪枕」という句を取りあげて、この句ゆえに遊女を歌ったと指摘できるとする。この句は、直接には「わたつ海によせては帰るしき浪の初もはてもしる人ぞなき」（『拾遺愚草』十題百首 地部十七

一一二に拠つたものであるが、おそらく俊成は、若き日の俊成自身も参加した『為忠家初度百首』における「遊女」題の歌々に、

ひとりねてこよひもあけぬたれとしもたのまばこそはこぬもうらみめ
あけくれはゆきかふふねにうつろひてなみのうへこそすみかなりけれ
うきたちてやどもさだめあまの子はなかなかよにやすみよかるらん
かはのせになみのうき草うかれありくそのたはれめをいかがたのまむ
たれとしもつまもさだめあまの子はゆききのふねをまつにぞ有りける
なみのうへにうきねのみするあまの子はさせるとまりをさだめぞうき
やどごとのそともふねをつなぎつつゆききの人をまたぬひぞなき〔為忠家初度百首〕遊女 七五二〜七五八

と、繰り返し「行き来」に類する語彙・内容が見られたことから、当該句に「寄遊女恋」題の歌らしさを感じたのではなからうか。しかし先ほど述べたように、当該句は『十題十首』で雄大な海を歌った定家詠の句を学んで卑近な例に転じたのであり、良経にとつての「遊女」題の勘所は別にあつたように思われる。

をとこのけしきやうやうつらげに見えければ 小町

心からうきたる舟にのりそめてひと日も浪にぬれぬ日ぞなき〔後撰和歌集〕恋三 七七九／『新撰朗詠集』雑

遊女 遊女欲乗商船人_以梶打懸水_以袖掩面泣詠此歌 作者小町 六七四／『住吉物語』（藤井本）遊び者

ども 二六)

かりのよをおもひ知りてや白浪のうきたるふねうきたるふねによるべきだめぬ〔教長集〕遊女不定宿句題百首 九四六)

良経歌と同じく「うきたるふね」という句を持つ歌は、先行例として右の二作品をあげることができるのだが、このうち『後撰和歌集』七七九は、後に遊女たちによって盛んに歌われたことが『新撰朗詠集』で示される他、『住吉物語』においても「君ども」（遊女）によって「ながめ」られていたと記される。また、「遊女不定宿」という題で詠まれた『教長集』九四六は『後撰和歌集』七七九の影響下で詠まれた歌であり、いずれも遊女と密接に結びついた歌のなかで「うきたるふね」が用いられている。良経はこのあたりの歌々を意識して「寄遊女恋」題を詠じたのである。ただし、この句を用いた歌には

みづうみの舟にて、ゆふだちのしぬべきよしを申しけるをききて、よみ侍りける 紫式部
かきくもり夕だつ浪のあらければうきたる船うきたる船ぞしづ心なき〔新古今和歌集〕羈旅歌 九一八)

という作品もあり、「うきたるふね」のすべてが遊女と結びついていたわけでもない。このように良経歌は、今様の歌い手である遊女を詠むにあたってかなり臚化した表現を用いており、たとえば同じ「寄遊女恋」題で「なみのうへにうかれてすぐるたはれめもたのむ人にはたのまれぬかは」〔六百番歌合〕兼宗 一一四三)と「うからめ」の語をはつきりと織り込んだ例や、「仏名」題を詠んだ「冬ふかき有明のつきのあけがたに名のりていづる雲のうへ人」〔六百番歌合〕五九八 隆信)のなかに郢曲の詞章が明瞭な形で持ち込まれているのとは一線を画す。同様のことは、遊

女同様に今様の担い手であった傀儡子を詠んだ「寄傀儡恋」の良経詠にも言える。

十二番 左持 女房

ひとよのみやどかるひとのちぎりとして露むすびおおくさまくらかな（寄傀儡恋 一一六三）

右 家隆

むすびけんちぎりもつらしくさまくらまつゆふぐれもやどをたのみて（一一六四）

左右申云、共に傀儡の心かすかなり

判云、左右の草枕、傀儡の心、共にかすかなるよし方人各申云云、九番の左にや侍りつる歌の様にはいかが侍るべき、左の露むすびおくといひ、右の契もつらしなどいへる、共に優なるべし、持とす

左右の方人が「共に傀儡の心かすかなり」と述べるように、良経詠はすぐに題が分かるような詠みぶりになっていない。俊成は「九番の左にや侍りつる歌の様にはいかが侍るべき」と方人の難陳に対する弁護を試みているもの、²²⁾ 繩旅歌との差異を明確にし難い作品であることは否定できない。

このように良経は、今様の担い手を歌つた歌にすら歌謡の詞章やそれに類する語をはつきりと用いていないのである。しかし本百首を丹念に辿っていくと、今様の影響を受けたとおぼしき歌が本百首の中に含まれている。

十九番 寄樵夫恋 左勝 女房

こひぢをばかぜやはさそふあさ夕にたにのしはぶねゆきかへるとも（一一七七）

右 中宮権大夫

ましばるしつにもあらぬ身なれどもこひゆゑわれもなげきをぞつむ(一一七八)

左右共に無難之由申す

判云、左歌、風のさそふや、おくるなどぞあるべからんときこえ侍れど、鄭太尉が溪のみち思ひやられて、優に侍るべし、右歌は、ましばるとおき、又、なげきをぞつむなど、すこしおなじきことにある様に聞え侍るにや、左の勝とすべくや

一一七七の良経歌は、判詞に「鄭太尉が溪のみち思ひやられて」とあることから、『後漢書』三三列伝二三に語られる鄭太尉の説話⁽²³⁾の影響を受けて詠まれたとの指摘がある⁽²⁴⁾。「たにのしばふね」という句が良経以前に用いられることはなく、類似する先行例は管見によれば次の俊成詠のみである。

しば舟のがへるみ谷の追風に波よせまざる岸のうの花(『長秋詠草』暮見卯花といふ心を 一一二五)

ここで俊成は卯の花を主題とするものの、上句は良経歌一一七七と同じく鄭太尉の故事を下敷きとしている。また、同じ故事を詠み入れた先行歌として「みやぎこるひとのためにあさゆふにふくたに風ぞうれしかりける」(『為忠家初度百首』雑 谷風 為盛 六三六)があり、同説話を撰取するにあたって良経と共通する視線を感じる詠みぶりである。それゆゑ俊成は、判詞において鄭太尉を指摘したのであろう。

ところで、良経・俊成の詠に用いられている「しばふね」自体、あまり和歌には用例の見られない珍しい語であつ

た。

もとめ塚おまへにかかる柴舟のきたげになるやよる方をなみ（『堀河百首』雑二十首 海路 俊頼 一四四八）
かげさかりゆらのとわたる柴舟のこぎおくれたるなげきをぞする

しづぶねはほぶねのあとをおふものをまよひやすらんかすみへだてて
（『堀河百首』雑二十首 海路 頭仲 一四五〇）

おもふ事侍りけるころよめる
（『為忠家初度百首』春 海路霞 頼政 一六）

風をいたみゆらのとわたるしづぶねのしづぶねがれてよをすこさばや（『散木奇歌集』雑部上 一二九五）
わたせにはうぢのかはぎりたちぬめりるせきにかくるまきのしづぶね（『有房集』きり 一七三）
風はやみいたてにはしるしづぶねのおくれぬものはこひにぞありける（『林下集』ふねのうちのこひ 二四七）

俊成詠以外で良経歌に先行する「しづぶね」の歌は、右にあげたものがおおよそすべてである。

しづかりを、いでふね弁

さして行くしづかりをぶねさをいたみ

といへばしもつく、左衛門

まづこがるるはこころなりけり（『公任集』四三四）

田上の路にて

たびねするあしのまるやのさむければつまぎこりつむふねいそぐめり（『経信集』一五五）

芝を積んだ船を詠じた例は、数は少ないながら古くは『公任集』や『経信集』などに見られる。しかし「しばふね」という語としては和歌に定着しておらず、内容の面から見てもこれら二首は実景を詠んだもので、芝を積んだ船が「恋」とかかわる歌を見いだすには、やはり『堀河百首』の俊頼・頭仲を待たねばならない。

早期に「しばふね」を詠んだ歌人らには一つの共通点が見いだせる。それは俊頼・頭仲・頼政・実定というように、ほとんどの歌人に今様との関わりを指摘できることである。⁽²⁵⁾ただし、これをもって「しばふね」が今様由来の語であると即断することはできない。

「しばふね」に類似する「柴車」という語について、植木朝子氏は和歌における「柴車」の最も早い用例が『堀河百首』の匡房・頭季詠であり「今様の流行と時期が重なる」ことを述べた上で、「柴車」を早期に用いた歌人がみな今様と関わりが深いことに注目し、「この「柴車」の語は、素材に対し新しい語彙を求めようとした『堀河百首』において、匡房や頭季によつて和歌に取り入れられ、小大進・有房・親宗といった後白河院の身近にあった人々によつて、歌語として定着していったと考えられる」と述べている。⁽²⁶⁾これは「しばふね」という語の始発点とその後の広がりに重なる部分が多く、賤の男によつて樵り集められた薪を積む「しばふね」という語もまた今様に関連する土壌から汲み上げられた表現であった可能性を指摘しておきたい。

「しばふね」の場合には「柴車」とは異なつて語をそのまま詠みこんだ今様は残されておらず、その点で些か今様との間に距離があるようにも思われるが、

西山通りに来る樵夫　を背を並べてさぞ渡る　桂川　後なる樵夫は薪樵夫な　波に折られて尻杖捨ててかいもと
るめり
〔梁塵秘抄〕三八五)

樵夫は恐ろしや　荒けき姿に鎌を持ち　斧を提げ　うしろに柴木巻い上るとかやな　前には山守寄せじとて杖を
提げ
〔梁塵秘抄〕三九九)

というように、良経詠の歌題「寄樵夫恋」の「樵夫」を題材とした今様が複数残されており、その一つは樵夫の水辺における動向を活写したものである。現存する今様が『梁塵秘抄』のごく一部に過ぎないことを思えば、良経歌が題材としたような「しばふね」と「恋」とが合わせられた内容の今様があつたと推測することは、それほど不自然はなからう。

つづいて「鵜河」題で詠まれた良経詠にも、「しばふね」と同様に今様の影響をみておきたい。

廿三番　左持　女房

おほ井がはなほ山かげにうかひぶねいとひかねたるよはの月かげ（鵜河　二二五）

右　中宮権大夫

かつらがはななせのよどをうかひぶねくだしもはてずあけぬこのよは（二二六）

右申云、月夜に鵜をつかふことのあるにや、陳云、月よとはいへども、山のかげなどにてはつかふことのあるなり、左申云、ななせのよどをうかひぶねとつづける、いかが

判云、左、方人の難陳にすでにきこえて侍るめり、右、ななせのよどをうかひ舟とつづけるはあしくやは侍るべき、但、あけぬこのよはなどごとごとしげに侍るにや、不被庶幾侍らん、持とすべくや

右方人の「月夜に鵜をつかふことのあるにや」という難に対して「月よとはいへども、山のかげなどにてはつかふことのあるなり」と陳じられ、俊成がそれで了解できるとしたために鵜飼の場を詠んだ叙景歌として解釈されているのだが、「いとひかねたるよはの月かげ」と詠まれた良経歌にはやはり仏教的な罪業感が揺曳していたように思う。

まよふべきちぎりぞふかきうかひぶねこのよも月のいるをまちける『寂蓮結題百首』ふかきよのうかは 三〇〇

寂蓮は鵜飼が漁をするにあたって「月のいるをま」つてしていると歌う。この寂蓮歌は、当時流行していた今様を背景に、鵜飼が殺生戒を犯す罪深さを詠んだ崇徳院歌「はや瀬川みをさかのぼるうかひ舟まづこのよにもいかがくるしき」〔久安百首〕夏十首 二八⁽²⁷⁾から学んだことが指摘される歌である。すると、寂蓮の歌う月は実景だけでなく信仰の証である「真如の月」を意味するものとなり、自らの罪を自覚するゆえにその光を避けつつ漁をするということと二重写しになろう。

詠まれている景の近しさから見て、良経歌はこの寂蓮歌の影響下に成ったと考えられる。「いとひかねたるよはの月かげ」が、信仰の輝きに罪深い身をさらすことを厭っても逃れられない状況を、月夜にも山陰で鵜飼をすることがあるという実景の状況に重ね合わせたものとするならば、一首の解釈はより自然なものとなる。

当該歌を純然たる叙景歌ではなく、先行詠に流れる仏教的な罪業感を内包する歌として再度見直すならば、「鵜飼

舟」という言葉を選択した良経は、流行歌謡から発想を得た先行歌に拠つて詠んだことになる。無論、御子左家一門に見られた流行を取り入れたという側面はあるが、崇徳院の発想を是としないならば、貫之以来の伝統的な篝火の美を前面に押し出した作を詠いても良かったのである。⁽²⁸⁾しかし良経は「鶉飼舟」とともに、あえて「いとひかねたる」と釈教的あるいは述懐的な気分を醸し出すような言葉を取り入れて一首を構成した。そこには僅かかも知れないが、時代に横溢する流行歌謡の詞を掬いあげようとした意識があつたのではなからうか。

『六百番歌合』以前にも良経歌に今様の影響を感じる例は見られる。

わがおもふ人だにすまばみちのくのえびすの城もうときものはは『秋篠月清集』十題十首 居処 一二三

二番 左

前大納言実定卿

さりとともまつをたのみて月日のみすぎのはやくもおいぬべきかな

右勝

頼政

おもへただ神にもあらぬえびすだにしるなるものをものあはれは

左歌、まつをたのみてなどいへるすがたいとをかく侍り、まつすぎなど侍るやこれかれにかかりたるやうに侍らん

右歌はことかはりあらぬすがたのうたのことばづかひなどいとをかくこそきこえ侍れ、これは閭巷（むらびと）の鄙（びん）曲（びやう）のなかに、えびすだにものあはれしるなりとうたふ歌の侍るなるべし、かれをひきて、神にもあらぬえびすだに、といへるうたのすがたいとをかくきこえ侍るなり、ただしことすこし俗にちかくや侍らん、されど神の御なまかりて侍れば以右かつと申し侍るべし閑なる世にすむぞ嬉しき

『広田社歌合』述懐 一一九・一二〇 俊成判)

「えびす」という語は、「長月の有明の空のけしきをばおくの夷もあはれとやみむ」(『久安百首』秋 上西門院兵衛 一一四九)という歌が現存するもとも古い例としてあるものの、その後しばらく用いられることはなく、郢曲の詞章を引いて俊成が判じたこの『広田社歌合』以降、新古今歌人らによって広く詠まれるようになった。⁽³⁰⁾ ここであげた「十題十首」の良経歌は郢曲の詞章と同じく東人・蛮夷を詠んでおり、时期的なことを考えても今様を指摘した俊成判の影響下に詠まれたと思われる。

また、同じ「十題十首」には「いなりやまみねのすぎむらかぜふりてかみさびわたるしでのおとかな」(『秋篠月清集』神祇十首 二八四)という歌がある。この本歌としては、「いなり山しるしのすぎの年ふりてみつのみやしろ神さびにけり」(『千載和歌集』雑下 物名 みづのみ 僧都有慶 一一七八)を指摘するのが穏当であろうが、『梁塵秘抄』の中に、

稻荷には禰宜も祝も神主もなきやらん 社毀れて神さびにけり

稻荷をば三つの社と聞きしかど 今は五つの社なりけり (『梁塵秘抄』五二二・五二三)

という類似の詞章を持つ今様が並べられている。そもそも稻荷という題材は今様との結びつきが強く、『梁塵秘抄』には稻荷を題材とした神歌が十首収録されているのだが、そのほとんどが勅撰集をはじめとする歌集に見られる古歌を用いたものである。⁽³¹⁾ 稻荷自体が古くから和歌に詠まれる題材ではあったものの、今様の隆盛期に歌の題材として稻

荷を選ぶこと自体のなかに、今様な意識が内在していた可能性を考えてもよいのではなからうか。

以上、良経における今様からの影響を見てきたが、それらはどれも明確に表現されたものではなかった。ここから考えられることは、題材や手法には積極的に新しいものを取り入れつつも、「和歌らしさ」をもっとも表出しやすい詞については伝統的なものを極力用いることで、表現の新奇さへ抑制をかようとしていた可能性である。後代、『近代秀歌』などで「詞は古きを慕ひ」と述べられることの兆しが、この時期の良経からも読みとれるとみてよからう。ただし、本節で幾つかの例を取りあげたように今様なものを取り込もうとしている様子もあり、新しい要素に対する関心を失っていないことは注意される。

四、結び

本稿では、良経が本百首で内包していた当代性について確認してきた。良経は、先行歌撰取に関連する手法の面では短連歌に多様される方法を取り入れていたほか、物語を取ったり同時代歌人から新しい表現を取り込むなど冒険的であった一方で、詞そのものに対しては慎重な一面もあった。しかし全体的にはやはり、短連歌や今様といった和歌よりも低く見られていた文芸の要素をも嫌わず取り入れることで、自詠の表現の自由度を拡大しようとする方向にあったとみてよい。

本稿は良経歌を対象として論じてきたが、別稿において述べたように、⁽³²⁾ ほぼ同様の傾向は新風歌人らの多くに見られた。これまであまり指摘されてこなかったが、当代的な流行歌謡等の手法・語彙といったものが新古今時代へ向か

う過渡期の歌にとりこまれることで、先行歌採取の方法など表現の自由度が拡大していたのである。そこから、やがて新古今時代の詠風へと変化していったと、別稿および本稿で確認してきた一連の流れから推測される。

ただし、論じ残したこともある。これまで拙稿⁽³³⁾では建久期和歌に見られる当代からの影響に絞って論じてきたため、本歌取りとも関わりの深い「古歌」をどう取り扱うかということには触れないままとなっている。たとえば、流行歌謡である今様には数多くの「古歌」が用いられており、本稿で論じたように当代的な要素が和歌に積極的に取り込まれているときに、流行歌謡に歌われていた「古歌」をどのように位置づけるべきかは、新古今時代の歌論を考える上でも重要な問題となろう。これらの課題については今後検討を加えていきたい。

〔注〕

(1) 『六百番歌合』に関する論は多数あり、それらを網羅することはできない。そこで本歌合について言及されている主な単行書を次にあげる。

安井重雄『藤原俊成 判詞と歌謡の研究』(笠間書院 平成十八年一月)、谷知子『中世和歌とその時代』(笠間書院 平成十六年一月)、渡部泰明『中世和歌の生成』(若草書房 平成十一年一月)、山本一『慈円の和歌と思想』(和泉書院 平成十一年一月)、石川一『慈円和歌論考』(笠間書院 平成十年二月)、松井律子『藤原家隆の研究』(和泉書院 平成九年三月)、半田公平『寂蓮の研究』(勉誠社 平成八年三月)、松野陽一『鳥帯千載集時代和歌の研究』(風間書房 平成七年十一月)、上條彰次『藤原俊成論考』(新典社 平成五年十一月)、久保田淳『中世和歌史の研究』(明治書院 平成五年六月)、久保田淳『藤原定家』(集英社 昭和五十九年十月)、谷山茂『新古今時代の歌合と歌壇』(角川書店 昭和五十八年九月)、藤平春男『新古今とその前後』

(笠間書院 昭和五十八年一月)、谷山茂『藤原俊成人と作品』(角川書店 昭和五十七年七月)、青木賢豪『藤原良経全歌集とその研究』(笠間書院 昭和五十一年八月)、片山享『校本秋篠月清集とその研究』(笠間書院 昭和五十一年六月)、松野陽一『藤原俊成の研究』(笠間書院 昭和四十八年三月)、久保田淳『新古今歌人の研究』(東京大学出版会 昭和四十八年三月)、藤平春男『新古今歌風の形成』(明治書院 昭和四十四年一月)、有吉保『新古今和歌集の研究 基盤と構成』(三省堂 昭和四十三年四月)、久曾神昇『頭昭・寂蓮』(三省堂 昭和十七年九月)、岩津資雄『歌合せの歌論史研究』(早稲田大学出版部 昭和三十八年十一月)、峯岸義秋『歌合の研究』(三省堂 昭和二十九年十月)ほか。

(2) 谷知子『六百番歌合』『賭射』の歌(久保木哲夫編『古筆と和歌』笠間書院 平成二十年一月)、谷知子『六百番歌合』の「残春」「暮秋」の歌―御子左家と六条藤家(『解釈と鑑賞』七十二―七十五 平成十九年五月)、内藤まりこ「記憶にないほど古い歌―本歌取りの問題機制」(『言語態』七 平成十九年七月)、藤田雅子「六百番歌合」秋下「柞」十二番判詞「らし」をめぐって(『赤羽淑先生退職記念論文集』平成十七年三月)、小田剛「式子内親王と六百番歌合の詞―「鶉」「夕立」「閨」(『滋賀大國文』四十 平成十四年九月)、久保田淳「歌ことば―藤原俊成の場合」(『国語と国文学』七十八―八 平成十三年八月)、松尾漢「藤原有家の六百番歌合詠について」(『岡大國文論稿』二八 平成十二年三月)、磯村清隆「歌と物語の詩学―『六百番歌合』の「物語取り」(『城南國文』二十 平成十二年二月)、木船重昭「『六百番歌合』俊成判詞一面―その諧謔性」(『中央大学文学部紀要』三十二特 平成十年三月)、茅原雅之「六百番歌合における歌人の内部連関―家隆歌との関連を中心に」(『語文』百 平成十年三月)、茅原雅之「藤原家隆の和歌―六百番歌合詠について」(『和歌文学研究』七十五 平成九年十二月)、茅原雅之「藤原家隆の六百番歌合詠について―副助詞「だに」の用法を

めぐって」(『語文』九十九 平成九年十二月)海老原昌宏「袖の時空」『六百番歌合』の定家詠を中心に」(『日本文学論究』五十六 平成九年三月)、藤田百合子「『新勅撰集』と定家歌学」『六百番歌合』の「かひや」と「あまのまてかた」を中心に」(『日本古典文学の諸相』勉誠社 平成九年一月)ほか。

- (3) 小山順子「藤原良経『六百番歌合』恋歌における漢詩文摂取」(『和歌文学研究』八十九 平成十六年十二月)、小山順子「藤原良経の本歌取り凝縮表現について」『後京極殿御自歌合』を中心に」(『国語国文』七十五 平成十三年五月)、加藤睦「藤原良経『六百番歌合百首』覚書」(『立教大学日本文学』八三 平成十二年一月)、内野静香「藤原良経『歌合百首』の考察」古歌摂取の方法について」(『広島女子大國文』十三 平成三年九月)、新名主祥子「『六百番歌合』の恋題をめぐって」(『国語国文学研究』十八 昭和五十八年二月)、新名主祥子「藤原良経研究」『六百番歌合』の企画意識について」(『国語国文学研究』十七 昭和五十七年三月)、篠崎祐紀江「『六百番歌合』歌題考」四季の部をめぐって」(『国文学研究』七十 昭和五十五年三月)。
- (4) 伊東成師「藤原良経の本歌取りについて」(『学習院大学国語国文学会誌』二十三 昭和五十五年三月)
- (5) ゆききゆるすだちのをのうぐひすのけさなきそむるこひもするかな(『寂蓮無題百首』六八)
- (6) 今日くれぬあすもかりこんうだのはらかれののしたにきぎすなくなり

『文治六年女御入内和歌』鷹狩 二六〇)

この歌は「かりにこばゆきてもみましかたをかのあしたのはらにきぎすなくなり」(『後拾遺和歌集』春上屏風絵にとりおほくむれゐてたびびとの眺望するところをよめる 四七 藤原長能)という屏風歌を本歌とし、それを春から冬へと転じて詠まれている。「かれののした」という句は、『六百番歌合』の春歌が詠まれる以前に、春と結びつきやすい歌に用いられていたといえようか。また、「かれののした」という句は、のちに為家

が詠んだ「かたをかのかれ野のしたの若なづな雪さへつみてみらくすくなし」(『夫木和歌抄』春部一 寛元三年結縁経百首 二二六)のほかには現存する作例はなく、良経創出の句であった可能性を指摘しよう。

(7) 経家詠と同じ下の句を持つ歌としては、次にあげる慈円詠が存在する。

わが袖のたぐひはよると思ふまに鹿なく野べの秋のゆふ暮(『拾玉集』野露 五〇五五)

この歌の詠作年次については、詞書が「大納言しのびて会せらるとききて、人にかはりて」であることから、山本一氏が著書(注1山本単行書)の中で「大納言||左大将兼任以前の良経の場合」という限定を加えた上で、文治五年七月十日〜同秋のうち、と推定されている。しかし大納言が良経を指すのか明徴がないため、今回は本文中で先行例の一つに加えることはしなかった。

(8) 松野陽一『鳥帚 千載集時代和歌の研究』(風間書房 平成七年十一月)

(9) 注4伊東論文

(10) 拙稿「良経『正治初度百首』における本歌取りの機能と方法」(『明治大学人文科学研究紀要』四十七冊 平成十二年三月)

(11) 良経詠は、次にあげるような散逸物語との影響関係も考慮される必要があるだろう。

ちるはなをけふのまとみのひかりにて浪まにめぐる春のさかづき(三月三日 一五三)

大僧都いまだわらはに侍りけるとき、八月十五夜にゆるし給はせたりけるを、もてなしあそび侍り

けるさかづきのついでに あまのもしほ火の仁和寺の親王

いつもみる秋の半の空に猶ひかりそへたるよはのさかづき(『風葉和歌集』秋上 二八四)

『風葉和歌集』に名が見える「あまのもしほ火」という物語は、すでに散逸しており成立年代がはっきりしな

い。そのため良経歌との影響関係を云々することは難しいが、もしもこの物語が建久以前の段階で成立していたならば、良経の物語への関心が強かったことを補強する材料となろう。また、良経にはこれ以外にも、成立年代の分からない物語歌と大きく句の重なる歌が幾つか見られ、今後の散逸物語に関する研究の進行は良経歌における物語撰取の様相を考える上でも重要となろう。

- (12) 本稿で詳しく触れることはしなかったが、良経は「みねのあさけ」（冬朝 五五二）や「しぐれをいそぐ」（暮秋 四七九）というように詞の続けがらの新しさに関心を持っていた。こうしたことから、新傾向の撰取に積極的であったことが示されよう。

- (13) 「源俊頼の和歌と連歌―後代の和歌への影響」（『総研大文化科学研究』七号 平成二十三年二月）、「源俊頼の和歌と短連歌」（『国文学研究資料館紀要文学研究篇』三十七号 平成二十三年三月）。また、これに関連する発表を平成二十二年十月に「建久前期における十首和歌贈答歌群について」（和歌文学会第五十六回大会 於学習院大学）と題して行い、本稿でテーマとする『六百番歌合』以前の良経と周辺の新風歌人の先行歌撰取の方法について論じた。

- (14) 注3 小山論文「藤原良経の本歌取り凝縮表現について―『後京極殿御自歌合』を中心に―」

- (15) 蛇足的ではあるが、この歌に限って言えば、「さくらにくらす」という凝縮した表現に行きついた直接の契機として次の定家歌をあげておきたい。定家歌自体が赤人詠の世界と通底する内容である上、「くにくらす」という表現自体が珍しいもので定家以前に作例がなく、良経自身が初めて主催した百首歌で詠まれた歌の表現をここで自詠に取り入れたと考えても不自然はなからう。

さもあらばあれ花よりほかのながめかは霞にくらす御吉ののはる

(16) 注3 小山「藤原良経『六百番歌合』恋歌における漢詩文摂取」、新日本古典文学大系『六百番歌合』脚注。

(17) 定家は「二見浦百首」において「なれきにし空の光の恋しさにひとりしをるる菊のうは露」(『拾遺愚草』二見浦百首 陵園妾 二〇〇)と詠んでおり、結句の「なにしほるらん」は菊を素材として構成した恋歌という共通性から、定家歌の影響を受けていたとも考えられようか。

(18) 注13拙論

(19) 注10拙論

(20) 注3 新名主論文。注3 小山「藤原良経『六百番歌合』恋歌における漢詩文摂取」も新名主氏の論を受けて、「単に和歌表現の摂取という位相の問題ではなく、俗的題材への関心が基底にあることを重視しなくてはならない。」と述べる。また小峯和明氏の「きこりの歌—今様と説話—」(『中世文学研究』十九 平成五年八月)には、樵夫の今様(『梁塵秘抄』三八五・三九九)と院政期になつて現れるようになる「樵夫」題の題詠歌とは交差している可能性があるとの指摘がある。

(21) 隆信詠に対する俊成の判は「在明の月のあけがたに名のりしてゆく郭公といふ野曲のもじつづきにてこそおぼえ侍れ」というもので、隆信は当時流行していた今様の歌詞をかなりあからさまに取り入れていた。

(22) 俊成が言う「九番の左」の歌とは「うかれめ」という語をはつきりと詠みこんだ季経詠「うかれめのうかれてやどるたびやかたすみつぎがたき恋もするかな」(『六百番歌合』寄傀儡恋 一一五七)である。当該歌の俊成判は「左歌、恋もうかれめも、たしかにこれこそ侍るめれ」としつつも、「恋の心たしかならず」と方人に難ぜられた右の兼宗詠を「上句は優に侍るべし」と評価して季経詠を退けており、題意を示す直接的な語彙の使

用の有無は評価において大きな位置を占めるものではないことを示そう。

(23) 鄭太尉の説話は、『和漢朗詠集』の「春過夏闌はるすぎなつたけぬ 袁司徒之家雪えんととがのゆきもちたしめべし 路達わしたにはみなみゆかべにはまた 朝あした 南みなみ 暮くれ 北きた 鄭大尉之溪風ていたがぬがたのかぜひにしらたり 被人知にひとし」

(雑 丞相付執政 六八〇 菅三品) や、『宇治拾遺物語』一五三の「鄭太尉事」などによって当時広く知られていたと思われる。ただし、『宇治拾遺物語』の本文では「朝夕に木をこりて親を養ふ。孝養の心、空に知られぬ。梶もなき舟に乗て、向ひの島に行に、朝には南の風吹きて、北の島に吹つけつ。夕には又、舟に木をこり入れてゐたれば、北の風吹て、家に吹きつけつ。」と谷ではなく島の行き来であったという変形が起きている。一方、良経歌の下句と『和漢朗詠集』六八〇は詞章の重なりが強いので、良経は『和漢朗詠集』から発想を得たと見えようか。

(24) 注3 小山「藤原良経『六百番歌合』恋歌における漢詩文撰取」、新日本古典文学大系『六百番歌合』脚注。

(25) 俊頼・頼政と今様の関係については小川寿子「俊頼と今様」(『国語と国文学』五十九・六、昭和五十七年六月)

・植木朝子「源三位頼政と今様」(『国語国文』七十三・一、平成十六年一月) という先行研究がある。また、頭仲と今様の関連については尊経閣文庫蔵『今様の濫觴』(馬場光子「尊経閣文庫蔵『今様の濫觴』」(『梁塵』一、昭和五十八年十二月) に掲載の影印) の系図のなかに郢曲の相承者として名前が見え、実定は『吉記』の承安四年九月一日条に記された今様合で左方の筆頭に名前があがっているほか『平家物語』の「月見」に「ふるきみやこのあれゆくを、今様にこそうたはれけれ。」と記され、「ふるき都をきてみれば あさぢが原とぞあれにける 月の光はくまなくて 秋風のみぞ身にはしむ」という今様を歌つたとされる。

(26) 植木朝子『梁塵秘抄とその周縁 今様と和歌・説話・物語の交流』(三省堂、平成十三年五月)

(27) 崇徳院歌の背後に今様があることは、安井重雄『藤原俊成 判詞と歌語の研究』(笠間書院、平成十八年一月)、

注26 植木単行書、馬場光子『走る女―歌謡の中世から―』（筑摩書房 平成四年二月）などに指摘がある。

(28) 注27 安井単行書

(29) をちこちにながめやかはすうかひぶねやみをひかりのかがりびのかけ（『六百番歌合』鶴河 定家 一二二一）

(30) 拙稿『藤原俊成の和歌と今様』（『中世文学』五十五 平成二十二年五月）

(31) 『梁塵秘抄』の「稻荷十首」のうち和歌の詞章を取り入れたことが確認できるのは次の六首である。五一五↓『拾遺和歌集』雑恋 一二二一 平貞文、五一六↓『貫之集』三三五、五一七↓『後拾遺和歌集』神祇 一一六六 恵慶法師、五一八↓『古今和歌六帖』やしろ 一〇八〇、五一九↓『拾遺和歌集』雑恋 一二六八 よみ人しらず／『拾遺抄』四七三 読人不知、五二〇↓『拾遺和歌集』雑恋 一二六七 藤原長能。

(32) 注13の研究発表参照。

(33) 注13の研究発表参照。

本稿は、特別の断りがない限り、歌と歌番号はすべて『新編国歌大観』（『日本文学』Mag 図書館）株式会社古典ライブラリー）による。